

5. 次亜塩素酸ナトリウムにより消毒した種子のみわけ方

1. 背景と特徴

キュウリ斑点細菌病を主体に種子伝染性病害の防除法として標記薬剤による種子消毒が一般に行なわれてきた。

しかし、この薬剤による消毒法は薬液の濃度および浸漬時間を誤ると不発芽、発芽不揃いなど薬害が発生するので、特に浸漬時間は厳守されなければならない。このことから採種地（たね屋）で消毒し、さらに栽培地で消毒するという二重の消毒を避けるため、標記薬剤で消毒された種子の簡単な判別法を紹介する。

2. 技術内容

- (1) 用具 インク（色は指定せず油性のものは不可）
 皿（底の平らなもの ex シャーレ）
 ろ紙（脱眠綿、ティッシュペーパーでも可）
- (2) 方法 皿にろ紙を敷き、インクをろ紙が十分しめる位に入れる。その上に種子をピンセットで静かに置く。
- (3) 判別法 消毒済みの種子は1～2分後には毛細管現象で種子の上部に色がにじんでくる。
 無処理の種子は変化が起きない。

3. 普及上の留意点

- (1) アンチホルミン5%の20倍液30分浸漬（標準防除法）では発芽障害は起きないが、発芽が1～3日遅れた例があったので浸漬時間は十分に注意すること。さらに二重消毒することにより発芽障害を起すおそれがある。
- (2) 判別用種子は2～3粒でよい。

6. 半促成イチゴ栽培におけるハウスビニールの被覆時期について

1. 背景と特徴

南部沿岸地方のイチゴ栽培は1月下旬にハウスビニールを被覆（2月上旬に内部トンネル保温を開始し収穫盛期を5月とする半促成栽培が主体である。

この栽培型は5月以前を収穫期とする関東、南東北の栽培型と6月が収穫期である露地栽培の中間を狙うものとして定着している。この作型の問題点としては過繁茂や冬期自然状態